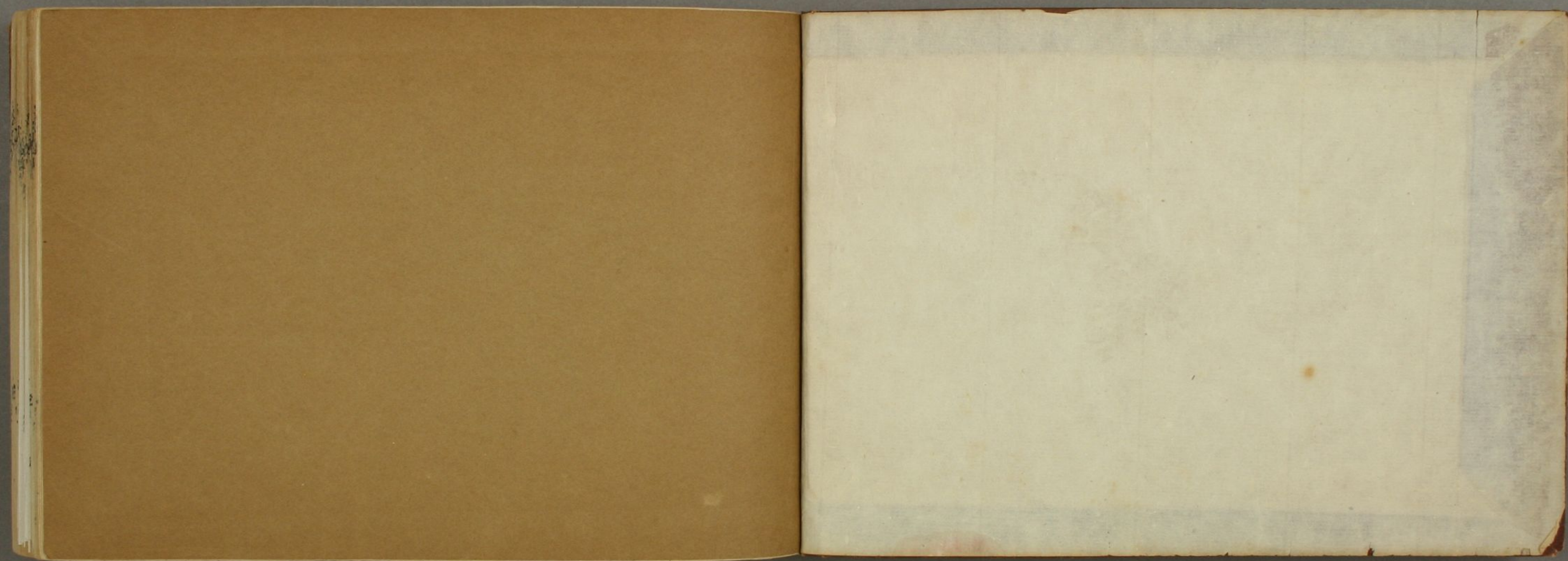




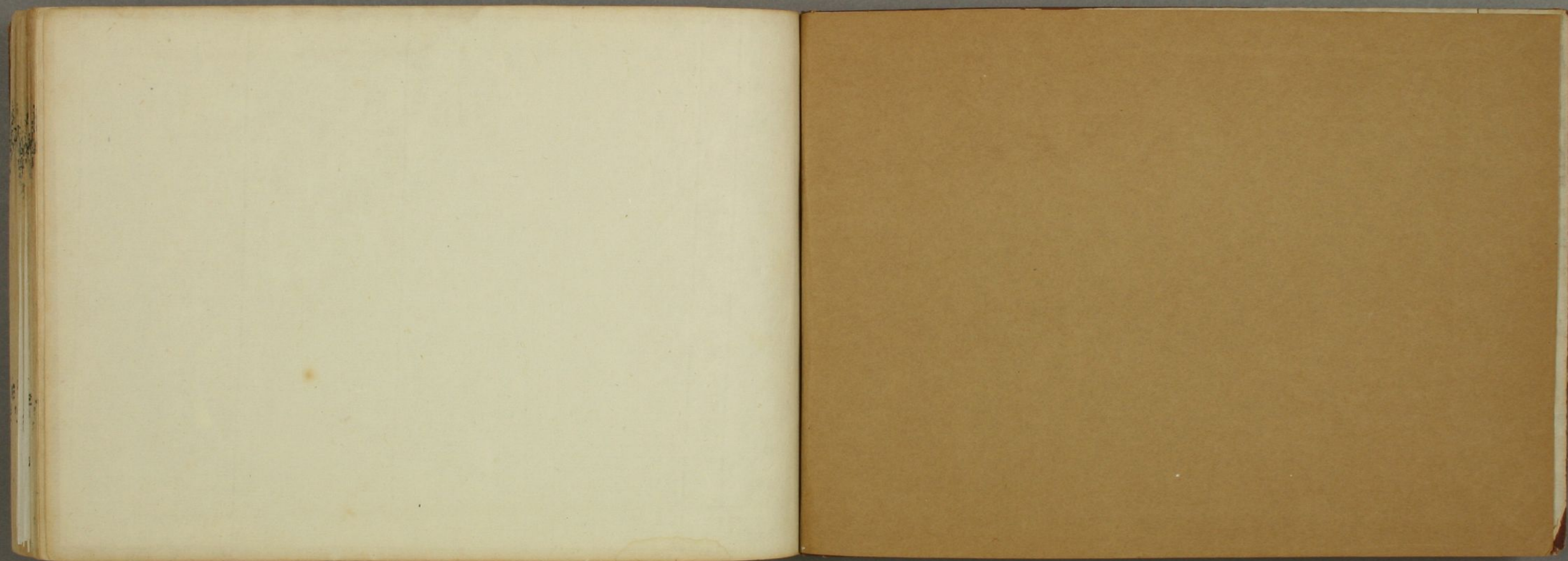
中村俊定文庫  
文庫 18  
83



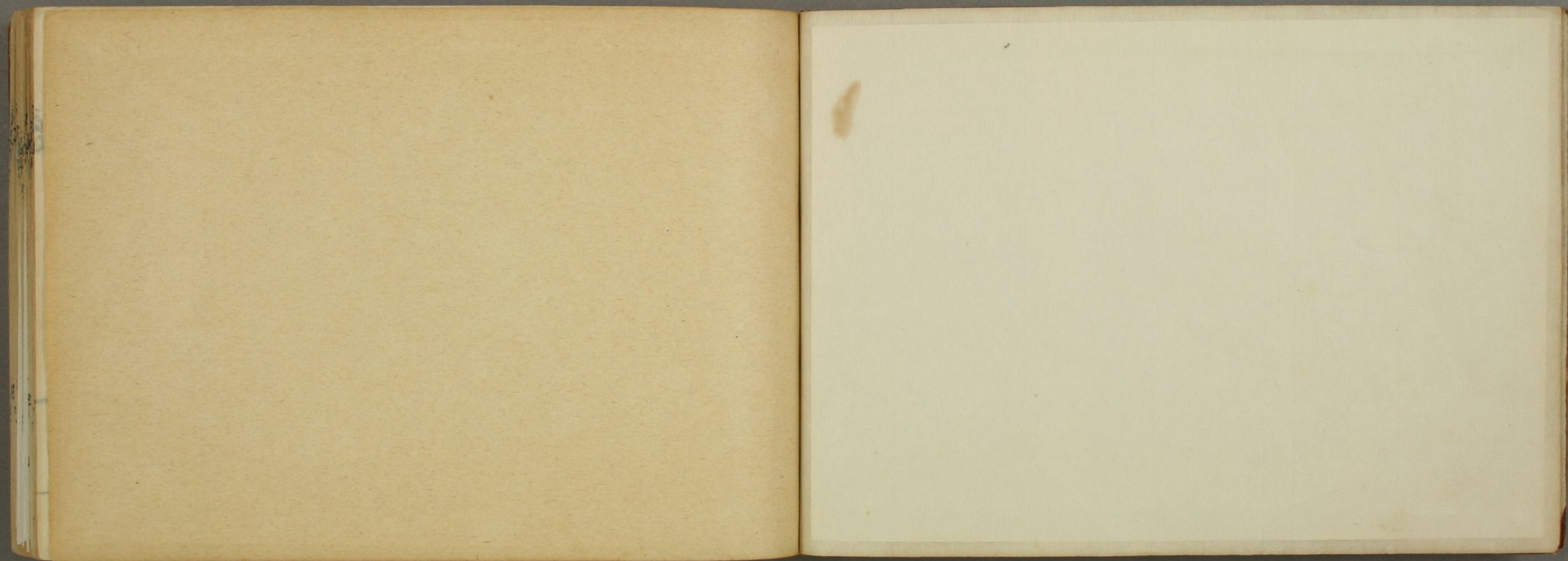
















大坂西山  
梅翁

人更不空や六月かよ〜  
停や急雨をま〜夕立を  
螢花態子よ掛ら浪ちり〜月  
用ん時乃林の初火翁  
月れ兼たの包あてぬ〜六月  
皆シテ有る乃わとの阿さ翁政  
持借乃ゆひや豊分に響き鏡日  
水換以後孔松乃む〜立翁



辛切又出海二見り浦淋一政  
よりこいのま海まは捨弁翁  
日かれ風乃らあ跡れ捨使立政  
そのまきあとのさ日福わり翁  
教又ふふ素もこもけり我も又政  
いごおんせん思ふ福やの戸翁  
枕経や記あかひらるるるん政  
よありわまよりねまこりあり翁  
あ乃乃寺西まふまははあひ翁  
お文化理地をあへ海翁  
あまを魚唯げまに下は月政  
三十は又交ありくじのま翁  
まけとらら目やの花ち翁  
是よりすくにきを遊乃ま翁

山風おとくはけしうぬり翁  
ゆまひと川浮まら翁  
おひまやこいまをわれ翁  
命一終まは供一者光政  
あ乃道うら物まはく叶翁  
七れ御一うあまひらま翁  
かこは乃ねをま直西り翁  
お日トトさらくわびせ翁  
あやまれきりわつこ別路翁  
今交磨もは後ま意翁  
まひんむうわ事かうぬ翁  
わすれぬあまこ十二味政  
秋まもちあはのわさ翁  
又霧とら愛丸山乃う翁



うそ物き道らあをよしこり改  
 わまると知れくつさりく改  
 張の碎後まき橋乃雲霧え改  
 さくらら程あつことさくらにえ改  
 わまらる今はくめぬ程改  
 滝云よ物入相乃うみ改  
 夕も又あ乃田れ又年米改  
 食養生れ 輝ま 聲一 翁  
 折くいせ山頭かきり露河改  
 秋の重風鬼 女うわりさ改  
 まこの屋に伊勢れあより月独り改  
 長野斗くはく書そ又より日  
 花の連におゆり宿しと人改  
 大磯は咲虎乃尾あつ改

そのちさり古鏡とあはれ改  
 うここれ鏡被まぬる雲改  
 これ此の法き急乃一具足控改  
 小細戸らの作くはくえ改  
 わ思ねすい急交せん改  
 いく兼福定よ昔小夜這人改  
 急乃一流石ふ月くさ改  
 急乃一云は法界も人改  
 急乃をのそい急乃つ改  
 行着乃い急乃急乃改  
 急乃子た急乃の急乃改  
 急乃く急乃より何とたま改  
 急乃急乃急乃急乃改  
 急乃急乃急乃急乃改  
 急乃急乃急乃急乃改



此の... 是と... 大教... 念佛... 賢... 中... あり... 天物... 月... 志... 内... その... 是... 年...

此れ水... 行... 以... う... あり... 一... 如... 家... わ... 難... 夕... ね... 照... 春...



夜ふ川神乃浦風相提た改  
夫婦一河不われ屋乃内器  
中細云のせと路とく意れ種改  
名道れ言名尾張八郡系  
いさほく八割あるを初とし改  
さやうのさうりに砂流併日  
今朝乃花もつくる是羽等と系  
事状をのりてまきやれん日

大津  
系不ト

秋のひく減ふうへそ鼻毛ぬき  
小首かこむく脇息乃月  
繪巻よか山の色を初とて  
ありあり石灯りこころて余り  
夏衣うゝ肌ぬいゝ一やま  
のそこれらのむく雨乃そ  
日かろく風や瓢を誘ふらん  
ねれ葉うゝたるるけり掛り



水あらざるはなはぬよ波のうらまて  
志くれやまうた竹乃このうら  
塵は戸けき履柱り乃れ世を  
あひよはらてく鹿きり聲  
を討し新しし花よ花をや歌  
ゆきゆきせんむきー野乃乃  
今乃江戸宮中月乃の影さや  
あまやとゆきりてふ勤  
さかやうまをわらこのあけ  
き友娘を春夏秋あま  
なほ向情の坊乃よめいであふ  
ゆきまきまらすゆい山崎乃乃  
ゆきまきまらすゆい山崎乃乃  
あまのこころに静きあり

<sup>性</sup>  
性はなれ果は豊後東風少れ  
はなれいほりその他ありて  
おきむしあふはなせわもまた  
糸さあ〜〜〜あつてあふのみ  
まら直に毛折ともなれぬ縁 衣  
をんれ糸おま〜〜〜をぬへ  
あさよつとてむみ十有はみそふ  
とりもたねが乃きほ〜〜〜  
獨掛や芝居まのりれみわこ  
ゆき乃乃あ〜ぬ神乃ゆきま  
ねはほりたむすあをほりて  
ゆ〜〜火を〜〜  
ゆ〜〜の〜〜  
子乃刻〜〜神乃あふ



柳子もれありを志のむと摩子小跡  
悲れをかりしとぬん碑一ね  
世の中此純を實福誰とかも  
死を哀一字をば曾とくゆるまに  
神壇も志ししとめて志ししは  
いふとくも久入て痛おたうともや  
神乃雨なりけりかししと神なり  
あはれれと申元内後まを海し  
ふのほけとを祭祀とあつともあり  
月れしとられのうむいけ附  
夕露やうしとれ繩目むまありん  
うらひひしとも痛をすししと  
時まらしていしとたふかこり老  
ひしと山うしと山せらと山

大うしとあつしと口焼おむろや  
罪業の便は汝うしとたうれ  
此神ましとまきまきと此掛日記  
凡呂屋のうりおそりけの富士  
凸りむしとを流るあそひ者  
世ましと流るれとま口をのこ  
ましとあつしと情を袖しと  
帝しとまきしとと大呂ねしとや  
境うぬましとつらと人まきしと  
奥列ましとち猿乃しとまきしと  
以鏡ましと山ましと津りまきしと  
ましと山ましと山勢ましと山し  
夕月乃ましとれ敵ましと山し  
ましとあつしと山しと山しと



とひは乃ちさうなるらん秋の夜  
こころせむはしこ夢そあけし夢も  
おひよき屋内乃首尾をけしあむ  
とりたてゆへよ母のまへかえ  
小もよこしていあくれ仲だのこも  
とにもあつとも福ち損乃かご  
福れ半く一きり後つく  
利生方便傳ふとり一丈  
窓の月あつぬ月乃丸まこ  
そそ志のあきるむのむそ声  
まにのりこすまきり毛打つく  
今昔人よあつぬあいつの  
志あつとり花を要れるに庭の巻  
是もまてありや蝶くの舞

野れはさあは舞きあつておろすこ  
おんかうゆふ余所乃あつこを  
子孫母の室に迷ふや 葉とり  
かふとの良向あけぬえい  
をうけれ礼儀三百あつころよ  
セ天とつくはくくはくはく  
大この教堂をわあま余まら  
あんち一人のり那まらつり  
起もせえ森もせぬまはむらあ  
酸いもれをえんれひそあつ  
ふのゆき志れ山ゆふ息まね  
さあさあ十一はうきまのこたふ  
さあさあさあさあ水乃月  
あやしく山心釣をさうあつ



春刻やあけくら柿の雨羽織  
あけくら柿の雨羽織  
月影のちりあさる北枕押さえて  
花の下陰人よりさくれ  
縁のふさふさのうちに崩れ  
冠はさくらにのこるあけくら柿  
雪の勢やあけくら柿とやすらん  
陽よりあけくら柿のあけくら柿

桂宿

あけくら柿の雨羽織の梅の雨  
あけくら柿の雨羽織の梅の雨  
其乳文ゆるぎに風のかげりきて如風  
はぎの小掃ふま髪乃ちあけくら柿  
はぎ乃ち髪はぎあけくら柿  
古御乃ちあけくら柿  
月影のちりあさる北枕押さえて  
あけくら柿の雨羽織の梅の雨



うつゝつまのれ入江の大お撲宿  
しーのつたの源み節也  
節無あゝこ包ツクやさあも我と風  
白似せれね折くともうり政  
おささあさあさあさあさあ  
かささあさあさあさあさあ  
かひけつて肉乃座のさあ林し  
ま乃座あさあさあさあさあ  
時さあさあ又さあさあさあ  
さあさあ明乃さあさあ鼻紙弄  
たりさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあ  
彼節お野のさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあ

さあさあ車れお輪よさあさあ  
さあさあさあさあさあさあ  
白状よたのさあさあさあさあ  
園東さあさあさあさあさあ  
檀林よ九十九さあさあさあ  
氣根乃さあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあ  
耳こさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあ  
風の吹くさあさあさあさあ  
毎原れ乱て麻さあさあさあ  
たささあさあさあさあさあ  
小便さあさあさあさあさあ  
三日れ内下り何さあさあさあ



湯風呂ふ天下流夜を過けり翁  
 将石ひとり金子セリン翁  
 定家<sup>トヨトミ</sup>うきまはれ程地を今そ  
 小倉北山へせん人々島風  
 大こんの袋をくく大井川翁  
 まて事とせんたそお出さるり翁  
 花お系足今れぬ多を臺にそ人風  
 亭<sup>コト</sup>翁をけり神乃とわき政  
 流<sup>ユリカヒ</sup>星ちよけりとさぬれ大の川翁  
 月乃袖とふふそれもうんや翁  
 意れ奇長に慶房志第れ家政  
 と川と一産ふうぬ残さるけく風  
 知指ふふたまちりひれ親世流翁  
 氣まゝ頭巾ハ又こゝていふり翁

櫻合ふ大おの鏡れ風を多し風  
 晴風のむう一夏よう川よ政  
 君うふぬおふ一帯もふ十年翁  
 我身の物をも志れしむ翁  
 榎<sup>エダ</sup>をせれ因城とさくさ記也政  
 引<sup>ヒキ</sup>導<sup>ミチ</sup>まはれれ思<sup>オモ</sup>風  
 おらんれをわやれをれ海翁翁  
 けりく是ハ松茸一の笠翁  
 け世間拙れ醜<sup>コウラク</sup>を志り翁  
 くさゆれれまぬわられ枯風政  
 月やうる水うか川と川田翁翁  
 西<sup>ニシ</sup>前<sup>マエ</sup>毛<sup>モウ</sup>空<sup>カラ</sup>あなとさ東<sup>ヒガシ</sup>翁翁  
 掛<sup>カケ</sup>ふ<sup>フ</sup>音<sup>ネ</sup>浪<sup>ナミ</sup>音<sup>ネ</sup>角<sup>カド</sup>翁翁  
 あなや袋やひ川とけり翁



大思のうらな 橋は木で地は砂 風  
新明坊の庫裏ふ 誰やら 宿  
是を又一子輩 誰やら 宿  
ありく 羽取板 誰やら 宿  
門くハ 今 誰やら 宿  
りりりー こん 誰やら 宿  
色よきむ 誰やら 宿  
六法乃い 誰やら 宿  
はー 誰やら 宿  
物ひひ 誰やら 宿  
い 誰やら 宿  
お 誰やら 宿  
は 誰やら 宿  
か 誰やら 宿

秋風吹の 誰やら 宿  
か 誰やら 宿  
乃 誰やら 宿  
く 誰やら 宿  
谷 誰やら 宿  
榮 誰やら 宿  
く 誰やら 宿  
夕 誰やら 宿  
お 誰やら 宿  
又 誰やら 宿  
通 誰やら 宿  
新 誰やら 宿  
か 誰やら 宿



う川くりや五葉河より花をくさる  
子人きりれ出候うあり改  
山川乃末口相次松くぶ一宿  
清うよの川と富士の白雲  
喧嘩を死に絶えたる奴はきりぬ  
日中をよびく唐大とくく宿  
をれ学ありさけ入れ相換守改  
小刀乃くもくもくく川なり風

大坂  
儀友

是や唐は誇りたれ花の雲

雲雨おこし席下くけきく一交静  
お月朋拂もぬ神よ雲消くく夜  
大さの春なりよあ茶はむ之跡  
形過れ末を乃るよ小橋細く交言  
小刀とくさく一跡れきく浪行中  
全別砂粒をくくく水の月也  
一はくま人歌譜のよまはし



順くよまたさりとてきなりきりあて靜  
所建てもお前のむじはれ夕方友  
らとのつらほつりいとおく思ふ意も  
はめふせばおがしりあの中政  
俊のいとおはつれおはけ中  
岸よまはら辰辰ごみおさごうそ  
一葉の湯中をそと友ふる静  
りりやちりくし一は乃神風  
發舞をいつぬとあそりてのそ友  
今の世の中一平人せんさくを  
実りふふ事のはりおがしり一俺政  
いやそれ又いあつるおの寢告  
らつりおまお指おまおのそら  
入るれたららのおこしへのお静

はるるあそかおは信長おはまき吉  
あささるひのあかりりひのそ友  
あそおのそはつるおのそら  
難下りらり記せんさくそらも政  
ひいものあつたてらつるおはつる  
あまつりりらつるおはつるり静  
あそれおはつるそらおはつるそ  
地獄乃厨子おもつるおの火治  
六道のそらおはつるおはつる  
更けらつるおはつるおはつる  
おはつるおはつるおはつる  
おはつるおはつるおはつる  
おはつるおはつるおはつる  
おはつるおはつるおはつる



素山乃猪野の原に立ちたて  
るうらうらひき錦こころしや  
むのりといふくこのあまへ  
ゆうともあゆむそれ象の如  
かこ目をいふいて見ゆる  
之日と東田病つととと政  
是も又子とと道の樹乃花  
みくれくろや柳まかいら  
あうらな花よは成乃花  
志りしとてそはくし  
堀川のさくれ海りれうれ  
二こひとあははぢぢぢ  
たふううまあな月とらう  
田史か人と彼乃ゆの露  
風

い〜りや群世とよま  
喧嘩やいふも時乃ありま  
あ〜い〜い〜い〜い〜い  
のいてと海里やまけ伊勢山  
後さや細公時とあ人乃この  
義堂かりて降ぬりや又  
河田や守とそはな〜あ  
りあまた月の新音乃うけ  
上るあ〜い〜い〜い〜い  
たまさぬま〜い〜い〜い  
枕さ乃下ま〜い〜い〜い  
その枕んを嵐と〜い〜い  
以寺此律の花〜い〜い  
橋屋うつうい〜い〜い  
門前政



竹る町城またてどかありるを  
 友居乃海舟かうなるた静  
 らりしやも山舟船あて叶はま  
 一歌そのふ下さうやきさるる昔  
 西月もあすあふふに静あり友  
 やつそまきさふたもれ、後谷  
 らふ人もあふふありて静る風  
 雅波乃わや股と流るんを  
 ぬらほお粧の切うふあふさひき  
 せむる流やうも月志ろれら友  
 秀かとも自あつめあれう風よ昔  
 畢竟そんともうに志る風  
 ざりしてと花あふうまひて事ハ静  
 こころきべもそかり静あり政

わくはきさうこれあつら静る友  
 ううは日ようのみれさわけ中  
 ちりあんの流波をこそを家れ昔  
 げ致さやとり下流似有さ流  
 立役若宿然うらか流むれは五  
 石垣町の秋名ゆめ秋静  
 自影さうあつ針おはさるる昔  
 葛城やゆもささおのうう友  
 老らうの園志さ流むう一統中  
 今津のはやにわらうひも静る  
 空上川乃舟連はせてらうり後友  
 水乃かり日び月はうり静  
 一季居ありのゆやわさう政  
 おこしすは静る昔はうり作昔



摩訶河原舟を捨てり  
寄葉よきすなはち大長との  
あつしはれ九條乃沖雨乃む整  
正つりあつしよのさる梅うえ凡  
くくひあつし時代はこれあつし  
縁起やまをふびきり間て友  
白雲につてつてつて銀一枚  
るをさつてつてつてつてつて中

大津

川尾氏定書

つてつてつてつてつてつてつて  
目どのもつてつてつてつてつて  
裏はあつしあつしあつしあつし  
廣袖あつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつしあつし



露阿夏の宿をあらん様乃を  
 御守ひと川乃わされタレ  
 西へ月也修行乃あらわて  
 びりし作最羨りうし、い  
 びなうこひきあねもびう郎  
 志此お前めわと思ふせんぢ  
 御来乃夜も伊達道の魚う  
 よの法をききこいよまの  
 ちうかあり人れをうあう  
 きれぬのまじれく今日乃  
 船高川開けり打也なうち  
 ゆきし此思は種とあうへ  
 幕つまよひを海公乃陰  
 うこひしこもや余何か

心此思後うらまのこ  
 湯友のこいこあうこ  
 祇うこいこあうこ  
 甲れり一の東乃あけうを  
 親と子れんこあれ一乃各  
 本末下校を様をううく  
 右法眼筆の糸で折釘り  
 冬より雪乃きり山  
 情ぬるれ家と親り  
 月乃こもこま山  
 着たて川京城  
 此髪禿お白ひとあせ  
 世ひやうよあまは



志れお建とけし掛くれかきつれ  
二あしはしよとどずしが町人  
川船やせふりうそ久後まゝ舞  
豆腐くゆく夕浪 此れし忠  
よひ一木たもつう橋りるんよ  
はあふん何そ志かきもれかね  
あまくよぬ結ゆも今あるし  
ひりりそとれつ病 龜乃末  
ね竹をさうく月のは明く  
出居や命せれか 乃あま  
まのまこく麻乃き紙をまね  
あふのあふいと たらねえ事  
志るうもそそけうこの花まのむ  
とこりきこめぬ蝶く蝶く

しり細さうれ日影ちよは  
筒井れとく戸板をのり  
膏薬と威敷まうくはねり  
んくおのしり 橋り立あり  
まくわいふおねよきすけう  
行ひ人ききまは座ねらむ  
切繩やのほ笑止ぬ舞き  
下もれ放下わらわあかり  
打んふらわらうとそそい  
けり相人うこあきわやふ  
傷言れ恐れうぬまは一云  
うれおやめいれうらさ  
今晚の月う照後うむま  
とそと半よりきんぎを被り



志の傍のさなもん半を頼し  
虎の流まりくわうぬ園の戸  
母ひ入へむは母母わらうらん  
西よすむむをわまきんぬのうさ  
孝すけをせむれ内なる新西の係  
流りふよみの泉 漸 静  
あさ露やぬひをこりぬより橙  
坂み十町 月ききうきう  
腰をうひやまのいひぬるる山  
梓より高の俵わつげとれたん  
業がそのぶがうふくあまものり  
父わり母わり子阿架妻あわ州  
果鉄老乃わらちれ花を量討ら  
山吹色ははくむりやうさく

ひはうとたむすあうるひ衣  
あまをたかへん身れ毛もよう  
物まこねおやうの谷乃たくれ  
けが町ははよりし乃あま  
仰りれ三日うきせいせんより  
その夫をぬくぬくうらうのえ  
あれあ縁もそわううしり堂  
たうしうのきんしうる流あり  
せひもわ身もこりぬんやせをれ  
ひこのきんしううううか  
いしあうらうそれた半ぬり  
とんくらあまてひろあまれと  
まう其声ありとやまはらうり月  
涼しくあしてあわひのはゆ



神の酒りのきこふ一灰よせ  
秋を流るるより流るる友程  
わらわのわらわの心奪はむる馬  
立くくやそとくくく山市  
良れ也く建たる酒の心  
むらむらやとくくく人  
物々の切らまはるる  
西くく南東風きくく

五深  
木同

松風も是かてきや琴丸糸  
葉菊かなんりやもまの糸集如  
爰ふ又月乃桂をあらだせそ日  
うし乃合せ凡山陰乃陰日  
離<sup>ヒナ</sup>れのかのこまこまの糸日  
糸へはきもよりありし文ゆ<sup>ヒナ</sup>和  
集<sup>ヒナ</sup>ふ又日を此の時あらん日  
何新号乃寔の梅り校同

木集

一  
下



ば 采れ 庭かやうに まをたのしき 和  
 け 連しく まにうたことりあく 同  
 采れ 雨乞の中 神あはす 遠和  
 ねもく ぬく 品 定ぬやう 同  
 意をそふ 仕継ぎ 味れ 西あり 和  
 人形 集ふ 君 ぬ まり 乾 同  
 わら 書字 字たをき じやう 和  
 むつ 云 ぬく 福人 ぬこ 同  
 ぬこ ころふ ころり 枕を 寄き 同 和  
 人 ころ 志 ころ ぬり 子の ころを 同  
 なる ころの 敷ふ ころ 秋の 風 和  
 子 枝の ころ 残る 川を 火ま 同  
 水は 新 無 理ふの まる 燈 遠 和  
 同 敷 是 下り しの ころ 同 同  
 夕 入る 雲 雲 け げ 同 同  
 志 ころり ころ 加 ぬ 朝乃 下 風 和  
 結り ころ とも 我 ぬ ぬ 玉 同 同  
 煮乃 け 出れ 富士 見 西 和  
 侍 宵の ぬき 籠の 煙 空に 消く 同  
 所用 志 け け ころ 同 同 同  
 春の ぬい の ぬえ ころ 一 交 答 乃 下 同  
 ぬ 氣 ころ ち ころ して ぬ ぬ 世 の 中 和  
 大 酒 ぬ 科 ぬ け ぬ ぬ け 同  
 たり ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 和  
 かの ぬい 志 の ひ ぬ ぬ 同 同  
 終り ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 同 同  
 芝 右 乃 月 入 ころ の ぬ ぬ ぬ 同  
 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 同  
 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 同



梅女の子や名もあらずぬ床の声 因  
こゝろで夢寝でぬじり道に虫 和  
秋蔭風のなりきりあひませり 因  
香隠セツとてさき夕くれのうら 和  
郭公卯月八日此吉日とて 因  
刈雜歌 独吟乃き 和  
名のこゝろに母の信のなほに 因  
精進のあましくさくはたし 和  
まじりこゝろを時交のりり 因  
毛ぬんくろき物うらひひ 和  
足袋履入るをばあひれ 因  
いれいれわきま 和  
校むりハ物知の物も 因  
かいつのなま 和

蝶くはるのちりき文ま 和  
かざり山吹貝乃く 和  
きくことなほひくく 和  
瓦ふんは法跡を 和  
二寸釘浮世のさびや 和  
お歯黒をたあたる 和  
そくといふ女方今を 和  
編あまの雲 和  
さき指のまゝ 和  
みはれ菖蒲 十日の雨 和  
とへといふ子乃田を 和  
ね母子傳りか 和  
はそよ水月のま 和  
ゆかき 和



をんはめ乃露をかしむ露風 和  
ささくや虫のあごを立はく 因  
か人を招くまきい乃まゆ 又 和  
が川若ふむまふ海より若く 因  
八橋やま娘あふ葉をいふきり 和  
住まそぬ身乃月次ま香 因  
ふくお棠花の夢若五十 和  
松乃かり寐や小 和  
詠まハ一樹乃詠ま 和  
夕月こほまこ何さめ乃露 因  
金の娘若者の聲より 和  
いり能さくり 和  
所常むさん 和  
まきこそ 和

お志をわき包丁めはま 和  
よひよやわとねり 和  
是れたふし 和  
と 和  
ま 和  
ま 和  
あ 和  
の 和  
長 和  
猫 和  
別 和  
ま 和  
は 和



外の露下戸の樂に又可也和  
手そわけゆく砂糖桶のふこ因  
たうご此露より風の姿物と因  
下肉こそふ朝乃下草一和  
虫いさし子歌あそび又るに因  
寸めふいのびりくゆらぐ儼のまこ因  
お仕はやくはか因乃むあくり日  
奇此二親孝けりま書と和

言段

松ぞろも花詞としれおとほせん  
色ふはを後撞まき乃うノ巻保後  
ふり流まゆは露乃空をたれと日  
あふふあさうふ描れ流下こひ政  
破れくと世居のせりよ板ひさし日  
狭合たうはももも海歌後  
先一句かやうくれむの夢日  
勿備景乃露をさありお政



大喧嘩よりけまの死のあきなり 政  
緑まねのく志不の後の浦 俊  
ころらふとふ人あうらうやさん 日  
あのをあそぬもやりしてはる路 政  
たまらざる洞出湯あまら湯は 日  
ひひそとあのをはうゆううと 俊  
なうと人のそとんとぬく碎はれ 日  
うれ言あうと一象越うとふ 政  
中間のうらまはう水のはふ 日  
紙張を飛くさうとむらあし 俊  
ま砂地乃前張の田露も死 日  
心乃時代の君いよあう 政  
六條をよふいまこぬりまあ 日  
五條をたうととこぬとあう 俊

ひとい髪たうはあじふちる柳 俊  
いとらうあくもやむる 蛭まひ 政  
七月のうらあはくきうと雨 日  
彼とあへのなはらりと 月 俊  
けのふれ大はれ寄を奉加 日  
何のうらう好一棚たう 小舟 政  
一せふとく風あのをちりあう 月  
を我捨多事かうと禁制 俊  
後鏡乃皆まこぬぬ門のす 日  
格子より海かふ海寺えん 政  
いらあれとらさりえうす 日  
揚校乃とあまのひさし 俊  
うらうとあはれと細う月と 日  
人形とつと引系とて 政







きいしんくひ入用のかきれ交改  
 繰板のうしははぐる穴音後  
 竿れつりすすれ續も通尾改  
 板の紫白た麦の粉がらる後  
 郭のまをせせせんうゆむけ改  
 砥石の山を砥石こしりく後  
 ぬり中川あこ田苔れ整をむ改  
 水のありまくとこりり出た後  
 子代乃まきとゆとまへく一落限改  
 ぬそくたそけあるらうそく後  
 こねの花志るを明るたふり改  
 まるぬたのこれ出る管乃度後  
 鉄炮の火繩あうそつ着れ月改  
 一二乃橋をこしゆ小男麻後

将さうれ言ゆまの林と智加鳥は改  
 園どりの縄かしくあきうせ日  
 その中て独六科をゆるされ後  
 盛久礼ありく町 四改  
 せいまを縦冷屋の麻を離れ後  
 色まふたある朝 かも下前改  
 あう福れ梅もまをれゆと後  
 ありあや掛あねもあるん改  
 しろはまこれ股たあはてく改  
 子粒ふらむと産月の新改  
 背ひ身よあまゆ敵れ束の家後  
 勅尚とて根をまきりく改  
 本園をたまるれを改  
 忘れまのぞうあまゆ改

丙吟



いねりののあたるん能<sup>三</sup>持<sup>三</sup>を<sup>三</sup>や<sup>三</sup>後  
伊<sup>三</sup>も<sup>三</sup>く<sup>三</sup>懸<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>ぬ<sup>三</sup>の<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>も<sup>三</sup>血<sup>三</sup>判<sup>三</sup> 政  
我<sup>三</sup>思<sup>三</sup>ひ<sup>三</sup>又<sup>三</sup>人<sup>三</sup>の<sup>三</sup>子<sup>三</sup>も<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>り<sup>三</sup>後  
い<sup>三</sup>つ<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>も<sup>三</sup>役<sup>三</sup>者<sup>三</sup>く<sup>三</sup>げ<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>も<sup>三</sup>わ<sup>三</sup>り<sup>三</sup>政  
ま<sup>三</sup>て<sup>三</sup>か<sup>三</sup>も<sup>三</sup>白<sup>三</sup>い<sup>三</sup>ゆ<sup>三</sup>こ<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>ん<sup>三</sup>も<sup>三</sup>後  
う<sup>三</sup>ろ<sup>三</sup>ろ<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>の<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>ご<sup>三</sup>み<sup>三</sup>わ<sup>三</sup>り<sup>三</sup>政  
ち<sup>三</sup>る<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>も<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>は<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>ふ<sup>三</sup>り<sup>三</sup>後  
校<sup>三</sup>の<sup>三</sup>先<sup>三</sup>り<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>り<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>也<sup>三</sup> 政

律氏只計

川船やのぬれは下は丈坂ま  
定り張ちん初り乃る急  
割れり迎客二年月院く  
少せぬれ芝やひー垣乃庭  
彦安人小まをりすま文留のま  
京中一ふらふまこよかりせり  
あらまひよまをりこを引くま  
之杯ま老人鏡筒よりこ



舟をばし船におもひたりけり  
歸一丈一所り老乃家樂  
猶中ノ火を焼くも海ふさひ  
あつこまもや志もこれ数より  
あまふれこきそいづつ川てれ  
えん乃されかまのや足す  
ひここの流はまゝんははを  
子ふそりありあてふ所  
ぬるんその宰人ふり秋著く  
あつこまの教日光僧正  
丸なり内をそのせき先式  
夕うこのおそく歸ふまかり  
山山花以事たり初より  
無きれいり志くれあり

口きりて一わくまんと  
内く此物を清日掛ん  
ひ笑君のふり又とあう  
あり佛とを教をわひ  
くれぬ事え位牌むひ  
廻向發形則得 性生  
くまわのそそぬれに勤む  
加増をくらくあうそ  
みわりのあはれ足舟らや  
たつまうれ乃はくそ  
せいそんの寵えれそ  
それあうひかふ別と  
きさあれは存うそ  
足うまら山やまりの







露志とれ葉花の形跡の焼豆腐  
 二粒 三粒はむら子こ也  
 又あらんきあき命をわすれり  
 すりこむらひこもきとく  
 唐自はく菊のあふもくは無道く  
 乃乃枝折りりよまこりそはる  
 不とあは山移る日と音  
 吾羽まは海や汗もこりく  
 赤氣色乃ゆやのまよは掃ぬま  
 ぬんも拭や吸付たはこ  
 月さくのこも後乃初起り  
 雪あこりけくも場まのり  
 友花よ愛りやそ非りあふ十年  
 しくひまよこりあふも麻わこ

色地やまこり蹄子開む久  
 清水やぬぬあーたきこりけ  
 飯日秋々あこりまこりあひこり  
 兎乃あこりやうき法跡さ  
 しくも毛君乃おたあわうゆり  
 襟よ兵糧とけり運あり  
 一せき乃まこりあはるこり  
 本曾海道下り牆をよ赤紙  
 女部まゆゆこり上帯あふも  
 を川を目乃こり長刀あははや  
 神をまよあこりこりあふこり  
 苗耐うれ例すれか儒乃道  
 世さあこりお釈如乃願定の月  
 天竺震且紙てこりあふこ







秋風北吹を待ててそ教業師氏  
ものまうあゝと人老ふまてまし  
のこいふよんちの縁つるお綱氏  
若野北里のぬれしひま行  
精をいひせせれ山乃中よまらる  
今生後生あゝことおひん  
か心し似せれおあゝるまの乃氏  
月〜いんか〜目いまい〜お  
肩のこゝろ深うれをぬらり  
あむまふり〜ふ久又昔れお  
立ゆらふ昔や風言の目るん  
け過よりまを横へけり 月  
花の香を蟹乃やにせぬあゝ  
花はあゝふら〜れあゝとら

下帯ととる氷乃ひま〜と月  
とぬまて寐〜の昔もあゝ氏  
縁れ〜と〜一樹をか〜は〜ら  
か〜おあひ〜馬路はか〜い〜氏  
〜ら〜は〜さ〜は〜角〜ね〜ら〜り  
氣を〜と〜は〜は〜は〜は〜は〜氏  
老紳乃抱え他人の御法道乃  
〜の〜あゝ〜あゝ〜あゝ〜あゝ  
あ程より〜おあゝ山乃はらと  
之編乃山〜〜〜〜みわりらり  
り〜さ〜あゝ松原松原二三枝  
時あ〜と鼻もはら〜ふ〜夕〜あゝ  
小天狗の切表は月れ定るん  
醫者あゝ及もぬせは中れ秋氏

宗山  
下



釈迦既よ野高れ白雲をけれ雲因  
縁縁乃お寺より遠りりゆらん  
迷ひるハ部乃のぬややかゝる  
日之入おのりのや大穀と  
指いそ記揚屋ま志のひ臨ひより  
智親よりあ守あうきいそのふ  
一里よ六道と山路乃花れ下周  
妻れあゝゝや唯いさうもれ  
やもまれの隣せおをえり  
云儀乃ら付のこも 落雪  
いさこれ竹才并に紫れ葉も  
ぬゝゝんふおれ乃夜れ月  
冷ゝゝ雨ふ息便は晴も  
虚難ハ終 蘇れゝハう夢

神うまそ又恨うけいせれ嘆  
あれゝゝあわお誓乃はりあ子  
おれあゝのあゝゝゝあゝゝ  
自然乃財れ金子千支  
書置れ奥より足ゝゝお念山  
日行之人小男おのあ又  
夕暮れ月夜のせゝゝ夜り如  
命うけあゝゝ福ゝゝれれ  
ひゝゝあ何と夫を射る水鏡  
源平 牙 愛乃ゝゝは  
横をまゝらばおれ極より  
ゆるれ髪ゝゝゝ日乃志やうふ  
帷子のあさたおゝゝぬあひ  
ゝゝゝおやおれはゝゝゝ因



何あふかきそこあふあふらん  
あふらんあふらん 愁 告う伏因  
武蔵より又日本<sup>の</sup>夕台暮氏  
いつあふ風<sup>の</sup>よる糸丸籠梅因  
船宿よととほか<sup>と</sup>きつひひ縄氏  
そのととあ<sup>り</sup>く<sup>く</sup>下地急<sup>り</sup>因  
赤松れ粒<sup>り</sup>く<sup>き</sup>よ<sup>し</sup>打る<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>氏  
楠庵あけあ<sup>て</sup>ころ<sup>り</sup>ま<sup>さ</sup>ひ<sup>し</sup>因  
食鴉あひ<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>らん<sup>ん</sup>  
火吹竹<sup>い</sup>く<sup>く</sup>秋<sup>る</sup>初<sup>風</sup>因  
迎て<sup>り</sup>氣<sup>れ</sup>敷<sup>よ</sup>露<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>氏  
誰<sup>も</sup>是<sup>ま</sup>の<sup>筆</sup>々<sup>人</sup>の<sup>月</sup>因  
吾<sup>の</sup>待<sup>り</sup>く<sup>く</sup>い<sup>を</sup>う<sup>れ</sup>ぬ<sup>花</sup>の<sup>陰</sup>氏  
け<sup>く</sup>これ<sup>柳</sup>弦<sup>の</sup>青<sup>柳</sup>因

春<sup>も</sup>と<sup>や</sup>一<sup>河</sup>の<sup>流</sup>れ<sup>せ</sup>て<sup>因</sup>  
着<sup>け</sup>け<sup>や</sup>と<sup>や</sup>の<sup>昔</sup>の<sup>空</sup>氏  
佛<sup>と</sup>下<sup>に</sup>を<sup>い</sup>く<sup>り</sup>柳<sup>と</sup>と<sup>ケ</sup>因  
ま<sup>の</sup>あ<sup>れ</sup>差<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>氏</sup>  
あ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>世<sup>思</sup>ひ<sup>く</sup>や<sup>い</sup>を<sup>結</sup>籠<sup>因</sup>  
あ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>た<sup>う</sup>ふ<sup>は</sup>て<sup>も</sup>焼<sup>て</sup>え<sup>氏</sup>  
い<sup>く</sup>つ<sup>も</sup>縁<sup>際</sup>を<sup>持</sup>を<sup>控</sup>く<sup>く</sup>因  
換<sup>案</sup>さ<sup>う</sup>て<sup>追</sup>お<sup>され</sup>け<sup>氏</sup>  
他<sup>の</sup>地<sup>我</sup>ま<sup>あ</sup>れ<sup>を</sup>と<sup>と</sup>一<sup>氏</sup>  
あ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>吾<sup>れ</sup>う<sup>の</sup>ま<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>か<sup>て</sup>も<sup>因</sup>  
形<sup>中</sup>あ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>編<sup>き</sup>質<sup>く</sup>ね<sup>の</sup>露<sup>氏</sup>  
足<sup>く</sup>編<sup>く</sup>表<sup>之</sup>乃<sup>表</sup>れ<sup>月</sup>因  
あ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>れ</sup>て<sup>や</sup>啼<sup>き</sup>り<sup>く</sup>さ<sup>氏</sup>



志川よりと志言うあれよひ時よ因  
常仕あをせは秋う更し因  
夕嵐かふさつとりつづきの因  
鳥を踏もわうそひの娘因  
先日の有野れ奪ふ大も大因  
とん<sup>紅</sup>こゝろて雪ひらく因  
いふるう是庭前花よ風因  
おれ中よりと梅自よへ因

言及

花や人を供ふやうなる空乃雲  
あつちわかれわくわくはれ鳥  
吹しちる打久遠ふま風なり日  
果庭のそくきき日さあは夜  
物もあり入川口の平田毎日  
人され声のあとのあつち原  
切あひの級<sup>ひ</sup>のひうり月<sup>は</sup>日  
小染乃法へさしとくは芳夜



後乃世世系流ひとつれはるは  
り一好の好くもくはくはくはくは  
うしとんことり半もやあるん  
獨をわいのくくくくくくく  
かき川も流さあれと水風はに  
たつとてうく人浪の怪石は  
はくくもく好もあれわたり  
かきふあくくこのあまる大臣  
好くくくくもわくくくくく  
これいあけりのおおひ草平  
第ふくくくくくくくくく  
はくはくはくはくはくはくはく  
雲拂ふ二条の場のみわたり  
行幸の良ききりくくくく

好飲のうきあわつひはるの  
かきとつひりきこれといひ  
あくそわくくくくくくく  
あり神もくくくくくくく  
人悪うくくくくくくく  
卵のあそむくわくはくはく  
お地蔵も余のほくはくはく  
実と終麻はくくくくく  
かきくくくくくくくくく  
山吹といふくくくくく  
くくくくくくくくくく  
あけくくくくくくくく  
あきよ声あけくくくく



久人いよ伊勢此後亦考めて  
改よふ如く家 登 休 人 足 政  
砂一 荷よりゆん事ハ不定あり 徒  
耳乃ひくさうすき万舟に 政  
傾城を人々うかりしゆなげへ 徒  
陣場ふたわしうあ流又とく 政  
誰くをゆへは前九後三年 徒  
退風しうす神乃 燕 や 之 政  
いさ強くふらんの務をん 賜 だ 徒  
昔こひをくゆな乃 初 良 政  
賤う屋は月乃ねまこ 此 重 み 徒  
かまぬこもくわのこく 枯 政  
いよりあつる眼を 此 此 徒  
二月さうはひむしゆ 凡 乃 徒 政

くわと又まら人の立か 徒 政  
同屋れ新よ入あひれり 徒 政  
観せぬ世ハ荷 楚 の 燕 乃 徒 政  
ひつりの事いさく久 馬 徒 政  
刻付ふ 徒 此 徒 政  
一吹 徒 乃 月 徒 政  
度 徒 乃 徒 政  
拂子あまひく 町 徒 徒 政  
線香此 徒 徒 徒 政  
とふ人あは 徒 徒 徒 政  
者ふま 徒 徒 徒 政  
越さ 徒 徒 徒 政  
思ひ 徒 徒 徒 政  
徒 徒 徒 徒 政

三







去人親也元公のつふは言く政  
わうはえをばく神の五月而後  
さねめわつたん知えわま感や政  
急代園より令剛力士徒  
然れり思代さうお結乃繩政  
きにあいられらひいさる終く徒  
花よりし中はの日又さるる政  
柳こもこえくさる人なり而徒

言政

故事やん素人の耳よぶ勢よ  
なうれらうて明やを紀月  
帝崩たりのめや世にまらんく  
樽はゆらつて木の葉の時西風  
ゆの日影深ももるわの菊もせお  
まこいれさうり柳早よりを架  
むし竹のさうと進むるひが味  
小毒やまの福らうあはは



むら—たるはつりのよもは白鶴の  
はとあま—とふ外<sup>が</sup>科<sup>の</sup>—  
うらむたわら田乃<sup>あま</sup>—  
こり、の氷こ<sup>わ</sup>—  
うせはく借座の—  
うい—  
法<sup>た</sup>—  
小<sup>こ</sup>—  
そ<sup>そ</sup>—  
さ<sup>さ</sup>—  
銀<sup>ぎん</sup>—  
根<sup>ね</sup>—  
か<sup>か</sup>—  
こ<sup>こ</sup>—

晴<sup>は</sup>—  
おの—  
髪<sup>かみ</sup>—  
—  
大<sup>お</sup>—  
下<sup>した</sup>—  
橋<sup>はし</sup>—  
—  
別<sup>べつ</sup>—  
—  
老<sup>らう</sup>—  
ち<sup>ち</sup>—  
文<sup>ぶん</sup>—  
く<sup>く</sup>—







活かすに船はしる川もさきをえはしり  
 伽羅相おとせろと人乃の器  
 ありまに文入子観行りとの女  
 老んてまをいと志高く味はく  
 刺と倍ふるらへく海はなぬの交  
 以来れまあを昔よ終り宮  
 團乃ありひらりれ勢と投りり  
 新夜言し呼しあまはるる坊主  
 人といひまうと人の方むきこ  
 祿うまにんや東を流つり香  
 柘加持法能をたうたまるる  
 時よ月音にひびあわくそま  
 約よ高花をいねく越たあり  
 後吹ふまこりひ帰かりりり

おあしうらうらうはなれひひりりり  
 あんそ集運く夕日れま  
 門まの時にりまり揚屋町  
 よせあやまの世の母のあこ人  
 申むうらうらうはなれひひりり  
 こいにおやほくそ意乃のま  
 わる何おれ乃たくとあそののす  
 弟るゆまあうあおとれれ此  
 山うらまに白くはれをうま  
 くれあひるまに本ま乃月  
 まりうらうはなれ錦うらあまよ  
 止那うらうま砂方山の秋  
 時よはなれまあまのの勢有  
 便ちまあまのうらうはなれ風



これいさよふさふの歌はありあう  
とまれわいさきとみん縁をん  
山城のらぬはさりの肩作り  
片かの川原れとんをきとそ  
まき柳れ糸織ヨリとんをきせあり  
みされとく花をやは碎くとも  
京なる舟とりしと半が跡生山  
そりお息よとくあまきこうゆ

後集繪合千百韻

洛下住  
菱野谷 高田政集之

延寶五巳歲文月吉日

富小路通三条下丁  
如稿板



昭和十二年三月十五日影厚校合





